

庭からの旅

庭 への旅

天南星　　——山で出会った不思議な花たち

出会い

その不思議な形に出会ったのは、ほとんど山を下り終えて、先程まで下の方から聞こえていた沢音がすぐ横から聞こえるようになり、靄も晴れて五月の陽ざしが戻ってきた頃でした。道はもう山道というより、舗装はされていないものの何度か車が入ったことのあるごろごろ道になり、両脇の草叢にはハルジオンなど人里の植物もちろほら混じりはじめていました。

一緒に歩いていた妻が、あれ、なんだろう、と言って立ち止ったのです。その指の先には、何やら指人形のような感じで、葉を両の手のように広げながらむこうをむいて立っている、緑色の細長い形をした筒のようなものがありました。広い葉を縦に巻き込んで筒状にして、その先端をくるとカールさせたような形、全体に明るい緑色で、縦に赤と白の筋が通っています。指人形の正面にまわりこんでみると、筒の一番先には穴があいていて、その中に白っぽい棒のようなものが一本たっていました。不思議なことに、その草はそこに一本たっているだけで、周囲に同じような葉をした植物は全く見あたりません。なんだろう？　と二人で不思議な気分を抱いたまま山を下り終えて、ふもとに一泊することにしました。

宿に入ってから、携帯用の山野草図鑑を調べてみると、それは天南星（てんなんしょう）と呼ばれるサトイモ科の植物だということがわかりました。

大菩薩峠

その場所は中里介山の小説で有名な大菩薩峠のふもと、丸川峠から裂石へ下る道の途中でした。五月の連休のこと、峠への道の途中から眺められる富士山の姿を楽しみにしての山の旅、登りはじめはゆるやかな谷沿いの道で、一面の木陰を覆いつくす山吹の黄色が、両脇に居並んで我々を迎えてくれます。ところどころにスマレの群落もみられ、キツツキの声を遠く近くに聞き分けながら登っていくと、年経た木の肌に、天然の椎茸が生えていたりする静かな道が続きます。ところが、介山が小説「大菩薩峠」を書いたという勝縁荘の脇から急な登りに入り、峠近くの笹原へ近づくにしたがって、下から吹き上げてくる風が強まり、笹の間をぬける風音がヒュヒュと鳴って、次第に目を開けていられないほどの強さになってきました。下からの風はたつぷりと湿気を吸いあげており、それが白い靄となって峠の山小屋「介山荘」を覆っています。ちょうど天気予報では五月の嵐の到来を告げており、下界の様子は知らず、峠の小屋は夕方からたたきつける雨と吹き上げる風に大揺れとなりました。

翌日、雨はいくぶん弱まりましたが、まだ強い風の吹き抜ける中を、標高二〇五六メートルの大菩薩嶺にむけて早朝に出発、尾根道のため気温がいちだんと低く、いまだ芽を吹いていない灌木の間を白く流れてくる靄をかきわけながら午少し前に頂上へ到着、それまで吹きぬけていた風も頂上の樹立ちの中ではさほど強くなく、鳥の声も聞こえるようになって漸く辺りを見まわす余裕ができました。頂上から北の登山口である丸川峠への道はコケがみずみずしく、しっとりと水気を含んだ早緑の敷き物が蜿々と続いて樹下の空気を浄化しています。奈良県の大台が原に負けないくらいの見事なコケの群落です。

数時間そんな道を下ったあげくにたどりついたのが、先程の沢づたいのごろごろ道なのでした。一気に千メートル以上の下りを歩き終えてみると、やはり山上と下界とでは様子がかわっており、風はやみ、ときおり青空がのぞけるほどに天気も回復してきました。天南星は、悪天候の山道を歩くという心の緊張も少しほどけて、沢音に誘われ、あたりの景色を楽しみながら歩けるようになった頃、そのそっぽを向いた人形のようないでたちで我々を迎えてくれたのです。

天南星の仲間たち

この不思議なサトイモ科の植物は、ふもとの裂石ではいろいろなところで見つけることができました。登山口のすぐ横には、武田氏ゆかりの古刹、雲峰寺がありますが、その周辺をめぐるハイキングコースの途中や、そこから少し下ったところに何軒か並んでいる民宿の庭先など、地面に湿り気があり、なおかつ林からは少しはずれた半分日の当たる日陰のようなところに、掌をひらいて鎌首をもたげたような不格好な姿でたっているのです。

それはおそらく天南星属の中でもいちばんよく見かけられる蝮草（まむしぐさ）の花だったでしょう、透き通った明るい緑の花もあり、全体が暗い褐色で、縦に細かく白い縞の入っているものもありました。実は最初にみつけた花のように見える筒状の部分は、この植物では苞と呼ばれる花を覆う葉の変形物で、その中に巻き込まれている白っぽい棒と見えたものが、本来の花（数本の雄蕊のあわさったものか、または一本の雌蕊）なのです。天南星の仲間には、その花の部分が真っ白い餅のように見える「雪餅草」や、花の先端が細長い紐状になって上方へむかって立ちあがっているために浦島太郎の釣り竿に見立てられた「浦島草」、逆に筒の先端が下にむかってまるめこまれた形が乗馬の時に足を乗せる鐙という馬具に見立てられた「武蔵鐙」など、楽しい形をしたものが多数あります。雲峰寺のハイキングコースには蝮草のとなりに、蝮草の半分ほど背丈はありませんが形だけはよく似た、「半夏」という草もみられました。こちらはその塊茎が漢方でつわりに効く薬として扱われている薬用植物で、しばしば栽培もされていることから、そこにあつたものも、どこかで栽培されていたものの野生化したものなのかもしれません。半夏は一名を烏柄杓とも呼ばれており、なるほどその形が小さな柄杓のようにも見えなくはありません。

これ以後私の心を捉えてしまったこの不思議な植物、天南星とは、こんな偶然の出会いがあつたのです。その後我が家の庭にも、園芸店で売っていた小人半夏という小さな仲間が加わり、今年は三センチほどしかない小さなかわいらしい花を二つつけてくれました。

サトイモ科の植物たち

天南星の属するサトイモ科の植物の中には、意外と我々のよく知っている植物が含まれています。例えば切り花や室内で楽しむ園芸植物の中にも、「カラー」「スパシフィラム」「アンスリウム」など、よく見てみると似たような形の花をつける仲間が知られています。いずれも実際には花を外から包んでいる苞と呼ばれる葉の形や色を楽しむもので、それがサトイモ科の植物に共通の特徴だといえるでしょう。

その他にも観葉植物としてはよく喫茶店の窓際などに飾られている明るい緑色の葉をした「ポトス」や、夏になると水槽に浮かべて涼しげな風情を楽しめる「ウォーターレタス」（牡丹浮草）という水草などもサトイモ科の仲間です。

スパシフィラムの白い苞を眺めていると、それがミズバショウの花にそっくりということに気

がつかれた方も多いことでしょう。あの尾瀬の春を彩る湿原の花も、もちろんサトイモ科の植物です。また、もう少し玄人好みになって、ミズバショウの純白の苞を赤褐色に染め上げ、形もずんぐりと丸まっただるまさんのように見える「ザゼンソウ」も同様にサトイモ科の仲間です。

ザゼンソウは英語ではスカンク・キャベジと呼ばれていますが、その花が虫媒花であり、訪花昆虫であるハエを引き寄せるために腐った肉の匂いを発しているからだといわれています。この匂い、後に大菩薩峠のふもとにある群生地へでかけた時に花に顔がつくほど近づいてかいでみましたが、ほとんど感じられませんでした。気候などその時の状況によるのかもしれませんが、あるいはハエを引き寄せられる程度の匂いは、人間にはそれほど強く感じられないのかもしれませんが。

この愛すべきだるまさんの花は、もう一つ、自身で熱を発するという特徴も備えており、雪に埋もれた林床に顔をだしながら自分のまわりの雪を解かして平然と座っている様はまさに達磨禅師の坐禅をしている様に見立てられます。

さて、最後にそれほど知られてはいませんが、もしその実物を見れば誰もが仰天するに違いないサトイモ科の植物をご紹介します。その植物はスマトラオオコンニャクといい、花の大きさがなんと三メートルにもなるという世界最大の花をもつ植物です。何年前か、池袋の東武百貨店で開かれた「世界の貴重な植物展」に出展されましたが、大きさもさることながら、なんとも不気味な形の花でした。展覧会に出展されたものは精巧な模型でしたが、やはり数年前にロンドンのキューガーデンでこの植物が花をつけ、キューガーデンの来訪者数が新記録を達成するほどの話題になったことがあります。この花もザゼンソウ同様悪臭を発しているといわれ、花の大きさから考えても、キューでその実物を目にした人たちがいい気分で家路につけたかどうかは疑わしいものがあります。しかし花が咲くまでに二十年を要し、一度咲くとわずか数週間で命を終えるという潔さは、尾瀬の短い春を彩るミズバショウ同様にすがすがしいものを感じさせるではありませんか。